

〔新刊紹介〕

木田隆文・田村修一・外村彰・橋本正志 共編

『ひたむきな人々―近代小説の情熱家たち―』

三 上 聡 太

「ひたむきな人々」と題される本書は、文字通り、ひたむきな情熱に自らの人生を傾注する人々を描いた近代小説を、アンソロジーにしたものである。編集には木田隆文氏、田村修一氏、外村彰氏、橋本正志氏があたり、国木田独歩「画の悲み」から、宮尾登美子「連」に至るまでの十八編を収めている。

グレゴリ青山氏による装丁を見てもわかるように、アカデミックな硬質さはまったく感じさせない。むしろ洋書で言うペーパーバックのような親しみやすさがあり、初学者にも手に取りやすいようつくられている。

所収作品は短編のほか、半数は抄出によって「ひたむきな人々」の姿を追っている。作品を麗化させずに、これだけの数をまとめているのは圧巻という他ない。作品

の前にはそれぞれ丁寧な解説も付けられているから、はじめて作品にふれる場合でも、これらの知識を足がかりにして読んでゆける。

さて、本書を構成している〈ひたむき〉というイメージについてだが、私には編者の一人である外村彰氏の『岡本かの子の小説（ひたごころ）の形象』（おうふう 二〇〇五・九）がどうしても重なる。外村氏はその中で、「ある対象への一心不乱の没我によって、一時的にでも、矛盾や不安を強いられて生きる自らを熱く高揚させて真実に徹したい、という求願」をかの子文学のモチーフとして読みとっているが、同じようなまなざしは本書の作品にも向けられていると考えられる。ともすれば、ここから本書における〈ひたむき〉の位相も了解されてくるのではないだろうか。

アンソロジーからの文学史再検討がようやく叫ばれた昨日だが、これを編纂してゆくという営為にもまた、近代文学研究の可能性が内在している。ことさらに本書は、良質な研究者らの手によって編まれたものであり、その意義深さはあらためて言うまでもないだろう。

なお、本書と対をなす『ひたむきな人々―近代小説の落伍者たち―』も近日龜鳴屋より刊行予定とのこと。

（みかみ・そうた 本学博士後期課程）